

菊舎を画家として見る日本美術史研究者からの感想

パトリシア・フィスター

菊舎の俳画は、江戸時代の俳人がよくおこなった、素人絵の典型的なものといえる。詩を愛する友人や知人のために描き、形式的な構成や筆使いにはあまり関心はなかったようだ。俳人として名を馳せていたので、人々は絵画そのものではなく、菊舎の俳画を欲したと思われる。シンプルなデザインが加えられた菊舎の俳諧に魅力と興味をもっていったことは間違いない。また、画題の多様性は、彼女の幅広い関心を反映している。

菊舎はほとんど独学で、旅で見た絵画や木版画から学び、定期的に知り合の画家から何らかの指導を受けたようである。しかし、より形式的で精密な画風を学ぼうとはせず、心の趣くままに、簡略化したスケッチ風の絵を描くことで満足していた。彼女の書も、同様に独学による、大胆で自由な資質を持つ。絵画と書の技術を高めようとするより、菊舎は創造的なエネルギーを主に俳諧と漢詩の制作に向けた。

その結果、菊舎の画風はどの分類にも属さない独自のスタイルを持ち、中国的な味わいがある。主に文人が好んだ四君子のテーマ（特に竹、菊、蘭）を描いたが、伝統的な文人画と比べると、菊舎の筆致はより抽象的で、我流とも言える自由で即興的な筆使いである。俳諧と漢詩の両方に関心を持っていたことから、彼女の俳画には中国と日本の伝統が融合していく。

簡単にまとめると、菊舎は特定のスタイルや正式なトレーニングに制約されることなく筆と墨を自由に駆使して、独自の世界観を捉えた。それが菊舎の俳画の特徴であり魅力だと思う。

【パトリシア・フィスター】 国際日本文化研究センター名誉教授・菊舎顕彰会会員
日本美術史学者。米国オハイオ州出身で、米カンザス大学助教授などを経て1991年に京都の国際日本文化研究センターに。近世の女性文人画家や尼僧による美術を迫ううちに、尼門跡寺院に関心を持つようになった。2009年に尼門跡寺院の歴史や文化に光をあてた展覧会を東京芸術大学美術館で開き、文化財の修復プロジェクトに取り組む。2019年3月に国際日本文化研究センターを定年退任し、現在は京都市にある中世日本研究所（女性仏教文化研究センター）の研究室長。

講演中のパトリシア先生



（長府・徳応寺にて）



七絃琴を演奏中の
大隈雅子さん